# 交信

刈田真緒

梅雨が来ると融解する身体は重くなり、
しかしながら翌月には白くなる細胞に蝕まれるのだった
実像を拒否した代償、と
剝き出しの空城さえ濾過機に供するが
星もわたしも発火はどうにも未熟であって
穿てない

無機質な点滅の投影さえも煩かったから
先の静寂を採り揺れる
莫大であればあるほど
黒鉛は閃光の印象を残す
破砕、と名付けられた振動が
もっとも確からしく馴染むことだけが判った

迂遠な凪に呑まれた朝に
不可能性は美徳だと知る
透明になっていくほねを撫でたらしなり
それはなめらかな排他の受容
何郡目の波であったかもわからないまま
切り取るだけの熱線に委ねた